

「靈魂不滅の問題—16世紀のキリスト教と思想の理解のために—」

報告者 根占献一 (学習院女子大学)

本報告 (2007年12月22日口頭発表) は、靈魂不滅の視点から東西世界の16世紀を考察しようとした。以下の四点、即ち、第一に15世紀後期のイタリアの知的状況を、第二に16世紀初めのラテラノ公会議の内容を、第三に所謂宗教改革以後のヨーロッパの一文献を、最後の第四に16世紀末の日本での一文献を、この靈魂不滅問題との関連で検討した。この報告要旨では、特に最初の二点を詳述した。後半の二点は別の近い機会に論文にしたいと念じているが、ここではいくらか、その二文献を通して当日の報告要旨に代えたい。

ヨーロッパの一文献とは、1570年に異端として処刑されるアオニオ・パレアリオ (Aonio Paleario) 作、リヨンで出た『靈魂不滅論』 (*De animorum immortalitate libri III*, 1536) である。これは後述するように、ピエトロ・ポンポナッツィのように靈魂不死を疑っているのではなく、むしろこれを肯定的に捉え、ルクレティウスの『事物 (自然) の本性』 (*De rerum natura libri VI*) に反論を加えている。パレアリオの論調はここではローマ・カトリック教会の立場と異なっていない。次に、日本の文献とは、『イエズス会日本コレジヨの講義要綱 I』 (尾原悟編著、教文館、1997年) に含まれるペドロ・ゴメス (Pedro Gomez 1535-1600) の著作を指している。ゴメスは、これまた後述する1513年の教皇教書「アポストリキ・レギミニス」 (Apostolici regiminis) の公布以後の高位聖職者として、日本で靈魂不死をキリスト教の観点から理解してもらう必要性を痛感していた。この教書に関わる公会議の名も講義要綱には見られる。こうして靈魂不滅という、プラトンの伝統に多くを負うヨーロッパ的テーマは、わが国の思想世界にも挑むように登場したのである。

(一)

1489年5月4日、パドヴァの司教ピエトロ・バロッツィ (Pietro Barozzi 1443-1507) はパドヴァの哲学教員とその学生に向けて、「知性単一説論に反対する布告」 (*Edictum contra disputationes de unitate intellectus*) を出した。その地の審問官マルティヌス・デ・レンディナラと協力して、「知性単一を論ずる者たち」に反対の意を表明する。布告によると、その説は徳への超自然的報いと悪徳のもたらす苦しみを除去し、人々に最大の悪事さえ難く行なっても良いと思わせるものであった。それゆえ、司教と審問官は知性単一に関する公開討論を禁じるとした。いかなる者も公に「賢いが邪悪なアヴェロエスの解釈によれば、アリストテレスの理論」と称することで、その立場を論じてはならないだろう、と結んだ。

パドヴァはヴェネツィア共和国の大学町として知られていた。この布告は、大学で不定期に行なわれる公開討論の場で知性単一と靈魂不死を論ずることを禁じたものであり、通常の講義を行なう者にこれを禁止するとはななかった。実は、バロッツィは公開論争だけでなく、こちらの形態にも不満を持っていた。ヴェネツィア元老院あて書簡 (1504年2月23日付け) から、「スコトゥスの道に従う神学の授業 (lectura. スコティスト派の

神学講座)」では、「世界の永遠性、知性単一説、無からは無が生じることについて」(de eternitate mundi, de unitate intellectus, et de hoc quod de nihilo nihil fiat) が当然のように主張されているとして、現実を嘆いている。ドメニコ派が1441年にパドヴァ大学教養部にトマスの講座を得たのに続いて、フランチェスコ派は1471年にスコトゥスの講座を獲得した。先の禁令布告の協力者マルティヌス(マルティノー)はフランチェスコ派であった。バロツィはパドヴァのスコトゥス派神学者たちに惹かれていた反面、先の書簡では彼らの思想的傾向を批判的に見ている。フランチェスコ派の間でドゥンス・スコトゥスは14世紀半ば以降に神学の第一位の博士として、これ以前に権威を有していた聖ボナヴェントゥーラとともに受容された。

ところで、ラテンのアヴェロエス主義者たちが主張したように、霊魂不死に寄せる自分の信念を主張する際、哲学が個人の不死を拒み、証明することができないと述べることは異端ではなかった。哲学が霊魂不死を証明できることをスコトゥスは疑い、ウィリアム・オブ・オッカムは否定した。ドメニコ派総長でもあり、枢機卿ともなるトマス・デ・ヴィオ(カイエタヌス)は、アリストテレスの『霊魂論』注釈(1509年)で、アリストテレスのこのプシュケーの学に従うなら、霊魂は死すべきものと結論づけた。アリストテレス『霊魂論』第3巻第4、5章はその曖昧な表現ゆえに、古代からルネサンスまで数々の学者、注釈者を悩ませてきた箇所であった。バロツィの死後作成されたその蔵書目録からは、彼がボナヴェントゥーラのような、より古い世代のフランチェスコ派の神学者たちやトマスを好んでいたように映ずる。彼らは期せずして、スコトゥスに反して、霊魂不死は証明可能とした。蔵書で注目されるのは、マルシリオ・フィチーノの数々の著書であり、プラトンやプロティノスの訳書である。プラトン主義の伝統では、基本的に霊魂は不滅であった。

私はことあるごとに、ルネサンス・プラトニズムをヒューマニズムから区別しながら、イタリア・ルネサンスの文化や思想を考えてきた。フィチーノに代表されるプラトン主義運動は、ヒューマニズム運動の継続の一面もあるが、他方で異なった内容の文化段階を示している。この哲学文化は明らかに文学文化とは質を違えている。フィチーノ以前のヒューマニストたちは、反アヴェロエスの言説活動は取らなかった。例外はペトルルカくらいであろうが、その影響は彼の詩作に較べれば、小さい。アヴェロエス説を格別の批判的にしたのは、まさにバロツィが愛読した一と覚しきマルシリオ・フィチーノ(Marsilio Ficino 1433-1499)であった。その主著『プラトン神学—霊魂不滅論—』(*Theologia Platonica de immortalitate animorum*)にはアヴェロエス批判を展開する巻が含まれている。1492年、プロティノス翻訳出版の序文では、フィチーノは明確に同時代のアリストテレス主義者を非難した。彼らが皆、個人の霊魂不滅を否定するアヴェロエス主義者か、アプロディシアスのアレクサンドロスに従う者たちだったからであった。

(二)

このような文化的・思想的転換が次世紀初めのラテラノ公会議に結実するのであろう。

16世紀の10年代の同公会議の教書（*constitutio*）には、「信徒たちによって常に峻拒されてきた、特に理性的靈魂（*anima rationalis*）の本性、それが死すべきものである、あるいはすべての人間にそれが唯一であるという、きわめて有害な誤り、毒麦を主の耕地に蒔く者があり、（そのなかの）ある者は哲学者気取りで、この命題は哲学に従えば、真理であると見なしている」、と。ここには、イスラムの哲学者アヴェロエスの説と所謂二重真理説が示唆されている。

続けて、ラテラノ教書は、ヴィエンヌの普遍公会議と、時のローマ教皇クレメンス5世の名を挙げながら言う。「同会議で宣言された規定（*canon*）では、知性的靈魂（*anima intellectiva*）は、まことにそれ自身でおよび本質的に（*vere per se et essentialiter*）人間の身体の形相として存在するだけでなく、不滅である。さらに、数多の数の身体にそれがひとつずつ（*singulariter*）注入されて、それは多数化され、またそうされるべきなのである。これが明確に福音から確定されるのは、主がくかれらは靈魂を殺すことはできない」（マタイオス10章28節）、また別のところで「この世で自らの靈魂（*anima*）を憎む者は永遠の生（*vita*）ではこれを保つ（ヨハネニス12章25節。共同訳ではくこの世で自分の命を顧みない人は、それを保って永遠の生命に至る）」と言われるときである。また、永遠の褒賞、そして永遠の罰を生の価値に応じて判断すると、主が約束されるときなのである」（マタイオス25章46節）。そうでなければ、化肉とキリスト教の他の奥義がわれわれにはなんのためにもならず、復活は期待されえないこととなり、かつ、聖人と義人は（使徒（註。大文字。パウロを指す）に従って）、「あらゆる人間のうちこれ以上の惨めな者」（コリントの信徒への手紙I、15章19節）はいないということになるだろう」、と。

先のヴィエンヌの公会議の「靈魂は肉体の形相である」という規定と同様、聖書的・キリスト教的伝統には見出し難い「靈魂自体の不死」は、ルネサンス期に高まったこの可否をめぐる議論と無関係ではない、つまりフィチーノの『プラトン神学』に見られるような、その強調の風潮と大いに関連があるであろう。ルネサンス哲学の優れた研究者のひとり、ジョヴァンニ・ディ・ナポリ（*Giovanni di Napoli*）師はその大著『ルネサンスにおける靈魂不滅』（*L'immortalità dell'anima nel Rinascimento*）で、このプラトン主義の隆盛と、今見た1513年の教皇レオ10世の教書「アポストリキ・レギミニス」（*Apostolici regiminis*）を関連付けた。靈魂不滅説のルネサンス的強化がローマ教会に影響を及ぼして、16世紀初めに靈魂不滅が信仰箇条になったことは、この時代のプラトン主義復興の反映と言えるであろう。靈魂不滅論のスンマというべき『プラトン神学』中の第15巻は、「不敬虔な」アヴェロエスに対する反駁となっている。フィチーノはトマス同様、信仰の理性的解釈は可能であり、また時代的にそれが求められていると考えていた。興味深いことに、教令には、先述のトマス・デ・ヴィオとベルガモ司教ニコロ・リッポマーノが、哲学は神学的立場に拘束されてはならないという理由から反対票を投じた。

引用には名指しされていないものの、パドヴァなど、北イタリアの諸大学で教えたアリストテレス主義者、マントヴァ出身のピエトロ・ポンポナッツィ（*Pietro Pomponazzi* 1462

ー1525) と彼の思想が批判され、否定されていると見ることができる。この教令発布以前の16世紀初頭から、ポンポナッツィは大学で靈魂の不滅がアリストテレス哲学に基づく理性的方法では断言できないと講義していた。そして1516年には『靈魂不滅論』(*De immortalitate animae*)を世に出した。これはもちろん教皇教書に賛成して執筆したわけではなく、公刊後、多くの批判書が印刷に付された。それは題名からして間違っている、彼は靈魂の可死を説いている、という者もあれば、また彼をその不敬虔ゆえに異端審問にかけるべきだと主張する者も現われた。これにはポンポナッツィも別の書を二本こしらえて応えた。

このポンポナッツィの学的活動を知るには、先ずアルプス以北の大学、特にパリ大学とは異なる当地の大学の実態を知っておかねばならない。ここでは、教養部、学芸学部が目的の異なる神学部を抗して、哲学の権利を主張する必要はなかった。パドヴァを始め、ボローニャ、マントヴァ、フェッラーラ—彼が教えた諸大学であった—などは、法律と学芸・医学だけの学部で、独立した神学部は存在していなかった。このため哲学は宗教、キリスト教のことを顧慮することなく、純粋に理性に基づく哲学的議論が可能であった。靈魂不滅の問題も、彼はアリストテレス思想を究めることで、信仰から切り離された同哲学の靈魂観を語る事ができた。そしてイタリアのそれらの大学の場合、教養部は医学部と関連していたために、アリストテレスの靈魂が自然主義的に語られることが多かった。このような大学の伝統はイタリアでは長く残り、17世紀まで辿ることができる。先の教書も、靈魂の死滅性あるいは単一性、世界の永遠性などの誤った考えを、大学やその他で公に講義する(*omnibus et singulis in universitatibus studiorum generalium, et alibi publice legentibus*)哲学者がいれば、それに反論し、できるだけ説得力ある論拠でキリスト教の真理を教えるよう、同じく哲学者に求めているのであって、教授してはならないとは言っていない。

ポンポナッツィ思想はその根本にアリストテレス哲学を有するが、生前の見返りとしての、死後の「正と善」(ゲーテの言)をキリスト教的な考え方から求めている点で、ストア派の影響の大きい、人文主義的な、まさにルネサンス的な思惟であった、と称されよう。果たして、彼が大学人として中立的・科学的立場で靈魂が不死か否かを論じたのか、そしてそれが立場の曖昧さゆえに所謂「中立的犯罪」(*crimen neutralitatis*)となるのかどうか、探究を進めなくてはならない。研究者マルティン・L・パイン(Martin L. Pine)はその力作『ピエトロ・ポンポナッツィ—ルネサンスの急進的哲学者』(*Pietro Pomponazzi: Radical Philosopher of the Renaissance*)でその副題に示しているように、ポンポナッツィが取った立場は靈魂の滅亡、必滅であったと解釈している。

Select Bibliography

Decrees of the Ecumenical Councils, Original Text Compilers: Giuseppe Alberigo and Others, English Editor: Norman P. Tanner, S. J., 2Vols, Georgetown, 1990.

Marsilius Ficinus, *Opera omnia*, Torino, 2Voll, 1962 (Basiliae, 1576).

Aonii Palearii Verulani *Opera*, Ienae, 1728.

Petrus Pomponatius, *Tractatus de immortalitate animae*, a cura di Gianfranco Morra, Bologna, 1954.

Pietro Ragnisco, *Documenti inediti e rari intorno alla vita ed agli scritti di Nicoletto Vernia e di Elia del Medigo*, Padova, 1891.

Le contrôle des idées à la Renaissance, édité par J. M. De Bujanda, Genève, 1996.

Giovanni di Napoli, *L'immortalità dell'anima nel Rinascimento*, Torino, 1963.

Paul Oskar Kristeller, *Die Philosophie des Marsilio Ficino*, Frankfurt am Main, 1972.

John Monfasani, Aristotelians, Platonists, and the Missing Ockhamists: Philosophical Liberty in Pre-Reformation Italy, in *Renaissance Quarterly*, XLVI, 2(1993), 247-276.

Martin L. Pine, *Pietro Pomponazzi: Radical Philosopher of the Renaissance*, Padova, 1986.

根占献一「イタリア・ルネサンスにおけるプラトン哲学とキリスト教神学」、『新プラトン主義研究』、新プラトン主義協会、近刊、第7号、31-38頁。

The Problem of the Immortality of the Soul. The Religion and the Philosophical Thought in the Sixteenth-Century Europe and Japan

NEJIME Kenichi

I tried to consider the relation of the Europe to Japan in the sixteenth-century from the point of view of the immortality of the human soul. In 1513 its immortality became the article of the faith at the fifth Lateran Council in Rom. I suppose that it was influenced by the revival of the Platonism in the *Quattrocento* Florence. Before and even after the year Mantuan Pietro Pomponazzi, the professor of the universities in Padua, Bologna and Ferrara, argued the possibility of the death of the individual human soul based on the Aristotelian philosophy. Pietro Barozzi, most influential bishop of Padua, was never content with the teaching of the unity of the intellect at the faculty of arts there. After the Reformation of the year 1517, Aonio Paleario, *eretico Luterano*, published the hexameter poem and defended the immortality against Lucretius, Roman pagan philosopher. Interestingly enough, in this point his position is near to the Roman Catholic Church. Pedro Gomez, Spanish Aristotelian Jesuit, earnestly taught the immortality of the *anima* at the Japanese *collegium*, as is shown in his *Compendium*, and vehemently criticized the Buddhism for his own interpretation that the religion of Buddha considers the death of the human soul natural and inevitable. I think that the comer in Japan enforced not only the veracity of the Christianity but also the Platonic theory on the Japanese people, both *kirishitan* (Christian) and unchristian. It was an interesting occurrence of history and an important encounter between the West .and the Far East.